

## 特集 統合失調症の社会復帰—— QOL の向上を目指したバイオ・ソーシャルな取り組み——

## 統合失調症の社会復帰

## —— QOL の向上を目指したバイオ・ソーシャルな取り組み——

堀口 淳, 水野 雅文

本シンポジウムは、現在の統合失調症の社会復帰に向けた最先端の医学研究を4人の演者にお話しいただき、特に「QOLの向上」をキーワードに討論することを意図して企画された。

まず、「統合失調症の異種性からみたQOLの改善」と題して、宮岡剛氏（島根大学精神医学講座）は「統合失調症の異種性」研究の一つとして、統合失調症患者では健常者や他の精神疾患と比較して、Gilbert症候群（GS）を合併する頻度が高いことについて述べ、統合失調症の病因や病態における非抱合型ビリルビンの関与について考察した。GS（+）の統合失調症群はGS（-）群と比較して重症度が高く、またGS（+）群は精神運動興奮性の高い緊張型統合失調症に多いこと、さらに両群の脳画像研究では、いくつかの脳領域で差異が認められることを述べた。

次に橋本謙二氏（千葉大学社会精神保健教育研究センター・病態解析研究部門）は「統合失調症の病態からみた新しい治療薬の開発」と称して、統合失調症患者のQOLの向上を目的として、認知機能障害にターゲットを当てた $\alpha 7$ ニコチン受容体アゴニストの開発状況を述べた。橋本氏は煙草の主成分であるニコチンに着目し、ニコチン受容体のサブタイプの一つである $\alpha 7$ ニコチン受容体が統合失調症の病態だけでなく、中間表現系の一つである聴覚誘発電位P50の異常に深くかか

わっていることから、 $\alpha 7$ ニコチン受容体に対してアゴニスト作用を有する制吐剤トロピセトロン（セロトニン5-HT<sub>3</sub>受容体拮抗薬）が、ヒトのP50に相当するDBA/2マウスの聴覚誘発電位P20-N40の異常やNMDA受容体拮抗薬フェンサイクリジン投与によるマウスの認知機能障害を有意に改善することを報告した。またトロピセトロンの単回服用が、非喫煙者の統合失調症患者のP50異常を有意に改善することも報告した。さらに最近、統合失調症患者を対象としたトロピセトロンのプラセボ対照二重盲検試験を実施した結果、トロピセトロンの8週間投与は統合失調症患者のP50異常を有意に改善し、認知機能バッテリーの中で注意機能を有意に改善することも発表した。

根本隆洋氏と水野雅文氏（東邦大学医学部精神神経医学講座）は、「自発性の改善と社会機能の回復」と題して、統合失調症の社会復帰の促進に向けた新たな治療戦略としての認知機能リハビリテーションとして、前頭葉機能と関係の深い発散的思考（divergent thinking）に着目し、①発散的思考における質の高い回答の産出障害が統合失調症において特徴的であること、②発散的思考の質的な障害が統合失調症の社会機能障害の重要な決定因子であること、③発散的思考を標的とした認知機能訓練プログラムが陰性症状や社会機能障害に有効であること、を明らかにした自身の一連の

第106回日本精神神経学会総会=会期：2010年5月20~22日、会場：広島国際会議場・アステールプラザ

総会基本テーマ：求められる精神医学の将来ビジョン：多様な領域の連携と統合

シンポジウム 統合失調症の社会復帰—— QOL の向上を目指したバイオ・ソーシャルな取り組み—— 座長：堀口淳（島根大学医学部精神医学講座）、水野 雅文（東邦大学医学部精神神経医学講座） コーディネーター：堀口 淳

研究成果について述べた。これらの知見から、発散的思考課題の特性とそれを活かした訓練環境設定は、「自発性」の改善を通じて「社会参加」と「満足感」を高め、統合失調症患者におけるQOLの向上に大きく寄与すると考えた。

最後に新村秀人氏（慶応義塾大学医学部精神・神経科学教室）らのグループは、「地域生活における「幸齢化」をめざして」のタイトルで、慢性期の統合失調症の老齢化を考慮し、老年期を目前とした患者の「幸齢化」が課題となることについて述べた。そこで、先進的試みを実践している福島県郡山市の「ささがわプロジェクト」について言及した。このプロジェクトでは約100床の精神科病院を閉鎖し、全員がグループホーム、アパートなどへの地域生活に段階的に移行した。プロジェクト開始後8年が過ぎたが、60歳以上の高齢群は、60歳以下の初老群に比べ、精神症状は安

定し、再発率は低いこと、しかし身体合併症による入院が多く、高齢化した統合失調症患者では、骨折などの身体合併症や認知症の発症も見られ、自立支援法の精神保健サービスでも、介護保険法のサービスでも十分な支援を行うことができない場合が出てきていることについて発表した。また、患者の向老意識や老後への準備行動を検討したところ、自分の老いに対しては楽観的だが、老いに備えた準備は十分ではないという特徴があり、また向老意識、準備行動と年齢、服薬量、精神症状、認知機能、全体的機能、社会機能、QOLとの関連について検討したところ、向老意識とQOL、準備行動とQOL、QOLと認知機能、QOLと社会機能の相関を認めたが、他の相関は認めなかった。そこで高齢化する精神障害者では、症状コントロールのみならず、QOLの改善をめざした幅広い援助が有用であることを指摘した。